



# ピースデポ

## 平和資料協同組合

Peace Depot (Peace Resources Cooperative)

発行人: 梅林宏道 / 住所: 〒223-0051 横浜市港北区箕輪町3-3-1日吉グリーンネ102  
 TEL: 045-563-5101 / FAX: 045-563-9907 / E-mail: office@peacedepot.org / www.peacedepot.org  
 郵便振替: 00250-1-41182 特定非営利活動法人ピースデポ  
 銀行口座: 横浜銀行日吉支店 普通 1561710 特定非営利活動法人ピースデポ

# 会報

No.12

2003. 4. 1

## 理想と現実の間で 揺れ動きながら

専務理事就任のあいさつ

田巻一彦

昨年末の理事会で、専務理事に就任いたしました。

私は、いつもピースデポは「ベンチャービジネス」だと言って来ました。今までだれもやったことのない、新しい理想と構想に「チャレンジする事業体」という意味です。「軍縮平和」「安全保障」という、これまで「国家」の独占物とされていた領域に市民の視点をもって乗り込む「挑戦」。それを、「事業として」成立させる…何人かがその活動によって生活をたてる…今までに(すくなくとも日本では)例のない冒険(ベンチャー)＝社会的実験である、と。同時に、ささやかながら平和運動につらなってきた私は、そこに「持続」の一つの形態を見つけています。



田巻一彦専務理事

この社会的実験にチャレンジするにあたって、私達がとりあえず手にしている財産は「人」です。代表以下理事に名を連ねる実績豊かなシニア・パーソンと事務局の若いスタッフです。そこには一とくに若いスタッフにとってはいくつもの困難が存在します。「理想＝ミッション」と、それが高ければ高いほど感じざるを得ない、力の限界という「現実」。さらに、この理想と現実の間でゆれ動く、当事者の「思い」です。

そのような三つの「磁場」の間で揺れ動くこと、この社会的実験の当事者のすべては、そのことから自由でいられるはずはない。いやむしろ、そのような三つの力がお互いに相互作用しあいながら作り出す運動エネルギー、それがピースデポの活力なのだと思います。時としてとても苦しい、孤独な作業になることがあるのですが。

かくいう私は、「生活のための仕事」に片足をおいて、いわば「課外活動」としての平和運動を二十年以上つづけてきました。専務理事として何か貢献ができるとすれば、「理想」と「現実」と「思い」の間の緊張に満ちた往復運動を、前に進むエネルギーにしていくための「知恵」を、若いスタッ

フとともに苦闘しながら探していくことができるかもしれないということなのだろうと思います。自分自身その三極の間で揺れ動く一人として。

ピースデポは、舳(もやい)を解いたばかりの小さな船です。どうか皆さん、この船を遭難させないよう、そして、クルーたちに、自信と確信と希望を与えてくださるよう、なおいっそうのお力添えをお願いいたします。

米英のイラク攻撃は私たちに、この上ない絶望と怒りを与えています。でも、だからこそ、この小さな希望の芽を育てていくことが大切なのだと決意を新たにしています。

## 2003年公開シンポジウムと 総会、大阪・高槻市で開催

首都圏以外でもピースデポを知ってもらいたい。意識的の市民とのめぐり合いを期待し、高槻市現代劇場で2月22日にシンポジウム「市民がつくる北東アジアの平和—今こそ語りあおう非核地帯を！」が開催され、約80名の参加者が集まりました。そして、23日には同劇場にて第4回総会が開催されました。

### ピースデポ総会関西準備委員会 に参加して

京都地域ポスト 有地淑羽

2002年総会で、次回総会はピースデポ会員増を目的に関西で行うと決まり、7月から準備委員会を立ち上げました。

京都ポストである私、有地淑羽と奈良ポストの木村宥子さん、ピースデポ読者会に参加して下さった会員の小林真樹さん(神戸)や藤田明史さん(西宮)にも声をかけ、また事務局から紹介のあった大阪の岩崎正さん、高槻の三浦寿夫さんと、事務局を含めて話し合いを始めました。

同時開催するシンポジウムのテーマは「市民がつくる北東アジアの平和」と決めました。集まったみんなの問題意識、目標は同じなのですが、これまで培ってきた運動形態などが大きく違い、場所選び、資金集め、シンポジウムの形態などでは、大きく意見が分かれました。

その頃、小泉訪朝、拉致問題、核開発疑惑と北東アジアをめぐる情勢は大きく変わり、ゲストの選定が大変重要なも

のとなりました。そこで、「市民がつくる北東アジアの平和」を考えるには、米軍基地問題と市民運動、自治体の視点が欠かれない、ということで大田昌秀(前沖縄県知事)さんを迎えてお話しいただきました。

梅林代表の話も合わせて聞きたいが、お二人の高い次元の話と、身近な運動との距離を縮めるためにも、高知ポスト・西森茂夫さんの平和資料館「草の家」で活動しておられる韓国の金英丸(キム・ヨンファン)さんとピースデポの中村桂子さんのお話も加え、大変よくばった内容になりました。

また、短い時間ではありましたが、コーディネータの横山正樹さん(フェリス女学院大学教員)の巧みな采配で、グループ討議を行い、ゲストと参加者が意見交換することができました。これもまた、ピースデポならではのことだと思のですが、これまで同席することのなかった団体がテーブルを囲む機会もつくることができました。ただ、欲張り過ぎた内容と時間の短さに残念の感は残りましたが、それでも80人ほどの参加者が集まったことは、ピースデポイベントでは初めてのことでした。

総会開催まで準備会では、「反核NGOの歴史」、「日朝交渉と北東アジアの平和構築」などの学習会をもち、お互いが講師になり、問題意識の共有にも勤めました。こうした学習会に参加したり、メールでご参加くださった和歌山の松井和夫さん、黒澤ゼミの佐藤江鈴子さんなども含め、準備委員それぞれのパッチワークで無事、関西での挑戦的な総会が終了したことを報告させていただきます。

### シンポジウムに参加して 平和、それは自分への問いかけから

佐藤江鈴子(大阪大学大学院  
国際公共政策研究科)

平和は創設されなければならないのだと強く感じた一日であった。今回の講演及びパネル討論での重要なポイントは「自分への問いかけ」であったと思う。この点を考える上で、次の2点に注目したい。

第1点目は、認識の問題である。政治家・活動家などの異なった立場から、地方自治体・地域・国際機関などの異なったレベルの視点から現状をどのように認識し、どのような北東アジアの平和についての展望を持っているのかを知ることができた。国際社会の行動主体として、国家に重点をおいてきた私の認識とは異なっており、新鮮な驚きを覚えた。

このような複数の認識の共有は、立場や視点の違いを越えた対話を可能にする第一歩であるだろう。

第2点目は、想像力の問題である。上記で指摘した各々の認識に基づき、各人が平和を追求する手段を自分なりに見だし、行動していることを知った。そこには、それぞれが持つ希望や要望を、実際的な実行可能性で調節するという考慮があると思う。これは、悲観論ではなく、極めて現実主義的な視点を忘れないということであると言える。自分には何ができるのかを想像力をたくましくすることで見だし、実際の行動に繋げている。

このように現在、政府・地方自治体・NGO・個人などの様々なレベルでの平和に対する活動が多層的に存在する。私は、それと同時にそういった活動の相互性をいかに確保し、さらにそれらをどのように収斂させることで目的を達成することができるかについても真剣に取り組まなくてはならない時期にきていると考える。そして、自分はどう関与していくのかを改めて考えさせられた。今回の講演会は、「自分には何ができきるのだろうか」と常に自分に問わずにはいられないものであり、再度自分自身を見つめ直す絶好の機会であった。

総会報告

## 新・専務理事を迎えての 事務局スタッフ2人体制 で乗り切ります!

2月23日、高槻市現代劇場で第4回総会が開催されました。議長は会員の小林真樹さんが選出されました。そこで採択された今年の事業計画を抜粋して紹介します。(2002年度事業報告と決算、2003年度事業計画と予算の全文は、近日ホームページに掲載します。)

### ■二つの重点

#### ●中期ビジョンの点検と改善

昨年度、中期ビジョン委員会の中間報告で提出された中期ビジョンに関して、その展開を絶えず点検し、随時、改善を行うことが、2003年度事業の基本方針の一つである。事務局長が退職し、当面はスタッフ2人体制を強いられることによる人的体制の問題、3人体制を復活させる過程の検討、新メディア発行を含む4本の柱の準備と実行の過程の立案と点検など、課題が多い。昨年設立した中期ビジョン委員会(委員長:田巻一彦理事)が、引き続き点検と改善の勧告の役割を担うことになるが、会員全員がこの過程に関心をもち、積極的な意見や提案をして頂くことを求めたい。

#### ●北東アジア地域安全保障への 重点的取り組み

平壤宣言、拉致問題、朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)のNPT(核不拡散条約)脱退宣言など激変する北東アジア情勢の中で、「北東アジア非核地帯」提案などピースデポの蓄積を活かした「北東アジア地域安全保障」への強力なとり組

みが求められている。幸い、「市民社会が構想する北東アジア地域安全保障の枠組み」(トヨタ財団研究助成)という研究プロジェクトが韓国、中国の研究者、活動家を含めて発足した。また、中期ビジョンでは「北東アジア地域安保」に関する新メディア発行を一つの柱に据えた。こうした活動を中心に、北東アジア地域安保への重点的な取り組みを行うことを、基本方針とする。

もちろん、核軍縮問題への取り組みは継続する。有事法制、憲法改悪の動き、沖縄基地の動向などは、「北東アジア地域安保」のテーマの重要な一部であり、情勢を絶えず注視しつつ、本会の果たすべき役割を考える。

## ■事業計画

### ●新プログラム

#### (1) 研究プロジェクト「市民社会が構想する北東アジア地域安全保障の枠組み」の推進

研究は、次の4つのテーマを出発点として開始される。

- ①北東アジア非核兵器地帯(テーマ・コーディネーター: 梅林宏道)
- ②北東アジア専守防衛地帯(同: 田巻一彦、協力: 湯浅一郎)
- ③地域的なミサイル制限機構(同: とりあえず梅林宏道\*)
- ④アセアン地域フォーラム(ARF)の活用(同: 梅林宏道)

※後に黒崎輝がコーディネーター。

プロジェクト・チームの連絡調整役であるチーム・コーディネーターとして中村桂子(ピースデポ・スタッフ)が働く。これらのテーマに関する各種セミナーが開催される。それらの多くは、会員を始め、一般に公開される。

#### (2) 「北東アジア地域安保」に関する新メディアの発行

東アジアの平和建設について、「現状に根ざし現状を打開する」対抗構想が求められており、その創造に貢献できるような情報を提供し、視点を提起することを目指す。ビジョン委員会の提案の4本柱の第1の柱として掲げられた事業である。田巻一彦理事が編集責任者となり、2003年10月の創刊を目指す。

#### (3) 「新しいイアブック」の実行プランの策定

現在の年鑑「核軍縮と非核自治体」の読者(とくに非核自治体)を確保しつつ、内容をより広く自治体の平和行政に関するものに広げ、上質の装丁にした年鑑を企画し、実行プランを立案する。「核兵器・核実験モニター」と「北東アジア地域安保・新メディア」の両方を基礎にしたものとなる。ビジョン委員会提案の第2の柱と掲げられた事業の一部。

2003年は、この「新しいイアブック」の企画、実行プランの策定のために休刊とする。

#### (4) 第2回世界NGO会議(長崎)への協力

2003年11月22日(土)~24日(振替休日)に開かれる核兵器廃絶地球市民長崎集会実行委員会が主催する核兵器廃絶のための第2回世界NGO会議に、積極的に協力する。梅林代表が、長崎集会実行委員会・副代表の一人を努めている。

#### (5) 「核兵器・核実験モニター」合本Ⅱの発行

2000年~2002年の3年分を赤字を出さない最低部数で発行する。索引の作成はボランティアを活用する。

### ●継続プログラム

- (1) 「核兵器・核実験モニター」の月2回(1日、15日)発行
- (2) 「核軍縮: 日本の成績表——NPT(13+2)項目に関する評価」

2000年NPT再検討会議における13項目合意、それに端を発した日本政府の新決議「核兵器全面廃棄への道程」によって作られた新しい肯定的状況を、日本の真の政策転換へと導くために、情報に基づいた日本の政策評価を行う。

事業の内容は、次のようなものである。

- a. 2003年成績表冊子の作成
- b. 成績案の段階で首都圏、広島、長崎などでの評価集会を開催
- c. 成績表の政府・議員への提出、メディアへの発表
- d. 英文化して国際的に発信(とくに2003年再検討準備委員会に持参)
- f. 2004年のための調査の継続

#### (3) 核軍縮議員ネットワーク(PNND) 支援

昨年発足したPNND日本を国際的議員ネットワークPNNDとつなぎ、日本ネットワークの活動が活性化するよう、NGOの立場から支援する。梅林代表が、国際PNNDの東アジア・コーディネーターに任命されている。

#### (4) 「核兵器・核実験モニター」及び「新メディア」の電子速報版の発行

「北東アジア地域安保・新メディア」では、最初からこの形態の購読が選択肢になるように準備を急ぐ。

#### (5) 3出版物の販売努力

ピースデポでは2002年に「核兵器撤廃への道」(かもがわ出版)、「ミサイル防衛——大いなる幻想」(高文研)、「米国・核態勢見直し」(ピースデポ・ブックレット)の3冊を出版した。それぞれに現実的な販売目標を設定し、販売努力する。

#### (6) 原子力空母母港問題調査プロジェクトのワーキングペーパー発行

#### (7) 日本の情報公開法を活用した防衛・外交問題の調査

#### (8) 調査プロジェクト「米軍」

#### (9) 執筆、講演、出演、取材への協力

#### (10) 海外活動への派遣

#### (11) 公開講演会・セミナーなどの開催

#### (12) ウェブサイトの充実

### ●組織体制の整備

#### (1) 中期ビジョン委員会の継続

中期ビジョン委員会は「実行過程を点検し、必要な改善策を提案する」役割を担っている。2003年事業計画は、中期ビ

ジョンの実行をめざして作成されているが、さまざまな不確定要因がある。また、短期的な人的体制も中間報告が前提としたものから変化している。このような中で、ビジョン委員会の役割はますます大きい。

2003年は、ピースデポの中期ビジョンに関して、その展開を絶えず点検し、随時に改善を理事会に提案することが、ビジョン委員会の仕事となる。

## (2) 理事会と事務局の新体制

事務局長が退職し、事務局専従スタッフが2名になった状況に伴い、2003年は次のような新体制でピースデポを運営する。

- ① 田巻理事が専務理事(パートタイム・ボランティア)に就任。専務理事がピースデポの日常運営を統括し、専務理事を兼務していた梅林は、兼務を止め代表職に専念する。
- ② 事務局スタッフ2人を中心に、臨時スタッフ(パートタイム)を加えた体制で運営。
- ③ 田巻専務理事とスタッフの協議によって事務局内の仕事の分担体制を明確にし、対外的な混乱を来さないようにする。
- ④ ビジョン委員会と理事会は、適当な早期に3人体制に戻すために必要な財政上、職務上の問題の検討を続ける。

(3) 会員、出版物固定読者の拡大

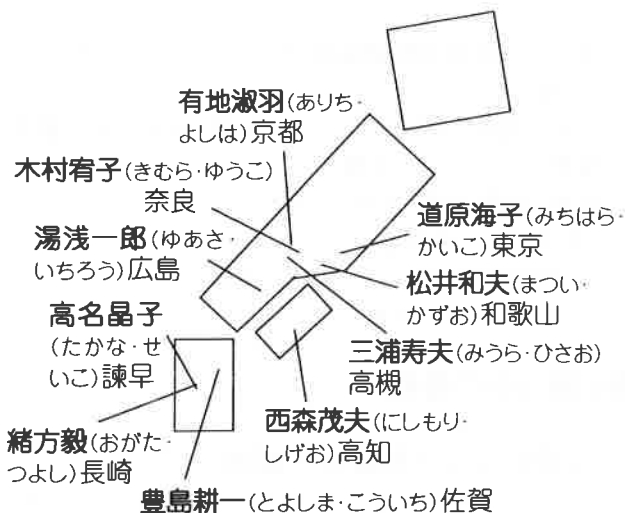
(4) ニュースレターの発行

(5) ボランティア、インターンなどの活用

(6) 企業・個人寄付金、活動の包括的助成をする助成金開拓

## 地域ポスト紹介

今年は新たに2つの地域のポストができました。また、昨年末で地域ポストを退任された札幌ポスト・君島東彦さん、松山ポスト・阿部純子さんには、これまでご多忙な中いろいろとご協力いただき、ありがとうございました。そして、以下の方々がピースデポの窓口となる「地域ポスト」となりました。



## 梅林さんと戦車闘争

Ⓣ

前回の会報(No. 11)では、米軍相模補給廠から戦車が実際に搬出されてしまうまでの100日間の闘争についてうかがいました。今回は、その教訓を生かしつつその後運動がいかに関わっていったのか、という点に迫りたいと思います。(聞き手: 山口響・スケッチ・ライター)

——最終的に戦車が搬出されてしまい、第一段階が終わった時の気持ちは?(注:その後補給廠監視活動に入る)

あまり区切りはなかった。戦車闘争中に、すでにやらなければならない課題は広がっていた。基地はまだ存在しているし、ベトナム戦争は続いている。戦車が搬出されてしまい、一つの挫折ではあったが、もっと大きな継続性のあるものだった。

——100日間の闘争の中で、全体として達成感がありましたか?

100日間戦車を止めたことで、ベトナムの人たちと連帯できたという達成感があった。ベトナム人留学生が来て感謝の言葉を述べてくれたこともあった。

——その後の運動で同じような達成感を持ったことは?

具体性において、それほどわかりやすく、それに比べられるような経験はない。何が比べようがないかというと、本当に普通の人たちが何かをして、非日常的な参加(座り込みなど)をしたこと。世の中のいろんなことをいっぺんに経験した。あらゆる階層の人たちが参加した。

——一方で、第一段階の闘争の後で、脱落してしまった人もいたかと思いますが。

何を引きずっているかということはいろいろあるだろう。脱落したという感覚を持っている人がいることを最近知った。しかし、それを引きずっているということは、すごくがんばっている人だということ。ただ、多くの方は、あそこで何かやれたという達成感で終わっているのではないかな。

——有事法制やイラク攻撃で一時的に運動が高揚しても、その後しぼんでしまう恐れがあります。

恐れというか、そんなものだったほうがよい。(戦車闘争のような)形では一生過ごせない。必ず普通の生活に戻っていく。そこでそれぞれが何をできるか。例えばこの絵本を作った人たちもそうだ。(注:「戦車は止まった」アゴラさがみはら出版)

——戦車闘争の後、三里塚や日韓連帯など運動の方向性を広げていった意図は?

「意図」というより、戦車の問題はそれだけで解決しえないという認識を運動の中で自ずと持ったから。同時に運動の中で別の運動に関わっている人とのつながりができ、その中でいろんな問題が持ちこまれた。

——そうした試みの一つとして、「現代革命を問う労働者・生活者センター」があります。

これは今はなくなってしまった。大きくいうと2つの道があった。一つは相模原という土地にこだわること、もう一つ

はもう少し大きなところから問題を解いていくということ。前者の発想で「センター」を作ったが、挫折してしまった。—今の段階において、市民運動と労働運動の連携を深めるにはどうすればいいのでしょうか？

歴史の流れとして、後退的なものと必然的なものがある。現局面においても、労働者は、労働者／生活者としてという2つのジャンルの問題を抱えている。労働運動としての形態が弱まった時に、労働者が地域住民としていろんな運動に取り組むというスタイルが広がっていることは事実。しかし、労働者としての運動も大事で、それは、職場を起点とした人間の良心に基づく運動、という視点。自分の企業の関わる環境問題であったり、安全の問題であったり。

—この戦車闘争の中から教訓を引き出すとすれば、一つは土着性、もう一つは(補給廠監視活動の例に見られるように)情報の重要性だと考えているのですが。

それは整理された教訓として、非常に重要。もう一つ、自分にとって、他の人にとっても大事だと思うのは、自分の想像力には限界があり、踏み込むことによってしか感じ取れないものがあるということ。「実践」の重要さがすごく大きい。今はもっとグローバルに考えた方がいい。理解しているつもりでも、途上国と先進国の関係には暗黒の部分がある。それは実践を通してしかわからない。

あの闘争の中では、あらゆる人が出てきて、自分の持っている価値観を超える発想をする人がいる。何か共有しているのかなあと思いきや、それも幻想だったりする。世の中、立場が違う発想があって、しかし出会って同じ事をやっている。先進国・途上国が同じ「環境」という言葉一つ取ってみても、全く言い分が違う。こういう時いつも戦車闘争を思い出す。戦車を止めるという一点で人が集まりつつ、基盤がものすごく違う。その全体を見る目、深い溝がありつつ、一つのことに取り組む、という点で教訓を得たと思う。

#### 事務所の動き

- 9月29日 韓国の「市民社会団体連帯会議」海外研修プログラム日本派遣団、来所。
  - 11月21日 「在日米軍/ミサイル防衛」出版記念講演会。
  - 12月4日 ピースデポセミナー「アラン・ウェアさんと話そう」。
  - 12月7日 北東アジア安保フォーラム構想会議。
  - 12月31日 川崎・事務局長退職。
- 2003年
- 2月22日 シンポジウム「市民がつくる北東アジアの平和」開催。
  - 2月23日 第4回総会。
  - 第12回(11/2)、第13回理事会(12/21)、中期ビジョン委員会(10/19、12/7)開催。
  - 「核軍縮：日本の成績表・2003」各地評価会議を横浜、和歌山、大阪、東京、函館、藤沢、長崎、広島で開催。(2003年3月21日～3月30日)
  - 新聞記者来所取材(2002年9月1日～2003年3月31日、10件以上)

#### 国際的活動

- 10月18日～24日 国連総会第一委員会(ニューヨーク)を中村傍聴。
- 11月7日 ピースポートと東北アジア非核地帯求める共同声明、記者会見。
- 11月21日 中堅国家構想(MPI)、外務省天野審議官と面会。
- 11月29日 「韓半島の平和維持、市民社会の役割—市民運動の具体的実践模索」シンポジウム(韓国)にシンポジストとして梅林参加。

#### こんなところにも登場しました

- 2002年9月～2003年3月末まで、行政や市民団体、大学の授業などさまざまな主催からの依頼を受け、約15回以上の講演、セミナー、シンポジウムで講師やパネリストとして活動しました。

## 「在日米軍/ミサイル防衛一大いなる幻想」出版記念講演会

小田原景子(フェリス女学院大学3年)

2002年11月21日、「在日米軍/ミサイル防衛一大いなる幻想」出版記念講演会が早稲田奉仕園で行われました。梅林宏道さんとデイビッド・クリーガーさん(核時代平和財団:米、サンタ・バーバラ市)から、本の出版経緯などの紹介に加え、両氏が在日米軍や、核についての様々な問題にとり組んできたきっかけや、これまで経験してきた活動、これからやっていくべきことなどについて、話していただきました。

両氏は、外務省に行かれたときの印象を、共にくり返し話



左から高原孝生さん(明治学院大学)、クリーガーさん、梅林さん。

しておられました。ミサイル防衛は、アクションとリアクション—攻撃と防衛—のエスカレートを生み出す恐れがあると話した時の、政府側の反応が印象に残りました。

ミサイル防衛に関して、例えば、北朝鮮側から見れば、北朝鮮対日米軍事同盟という考え方になるという話に対して、政府側は全く聞き入れる反応ではなかったということでした。本当にこのような心配はないと心から思っているのか、その場での話をはぐらかすためにこのような反応をして見せたのか、顔をジッと見ていたけれどわからなかったそうです。地域的に物事を考える時に一方的過ぎることや、市民と政府間の不透明性は、継続して考える必要のある重要な問題であるということに改めて実感しました。

そして約50名の参加者からは、時間ぎりぎりいっぱいまで、活発な質疑がありました。私は、皆さんが高い問題意識を持って、両氏の講演を聴いていたかということの表れだと思い、質問された方々にも、丁寧にお答えになっていたお二人にも、感動し、このような市民の一人になりたいと思いました。同時に、もっとたくさんの方がこのように感じられることが、お二人が共通しておっしゃっていた、市民の手によって始める平和運動の実現へとつながっていくことと思いました。とても充実した時間を過ごすことができました。

#### 編集後記

2人っきりになってしまった事務局ですが、その分ボランティアをはじめとする、みなさまの力に支えられていることを実感する日々を送っています。とくに総会関連では関西人パワーに助けられました。いろいろとありがとうございました。(中村、秋山)

